

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 5 月 10 日現在

機関番号：24302

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K15200

研究課題名（和文）山岳信仰にねざす山小屋建築の形式と形成に関する史的 research

研究課題名（英文）Form and Formation of Mountain Huts Based on Mountain Worship

研究代表者

奥矢 恵（Okuya, Megumi）

京都府立大学・生命環境科学研究科・准教授

研究者番号：40771689

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、山岳信仰の対象：御嶽山・白山・立山に着目し、近世から現代に至る山小屋建築の形態とその変容を検討した。御嶽山では、近世後期より袖小屋や籠り堂と関連する平面形式がみられ、現在も継承されていることを明らかにした。白山では、近世前期まで石垣で囲まれた頂上社殿とその直下にある室・堂が核心的な山岳景観を形成したが、近世後期の平泉寺支配後に堂が廃絶し、室も淘汰されたことを把握した。立山では、近世は室堂のみが存在し、その特異な構造形式は積雪対策だけでなく加賀藩の威信を表徴した。明治には近世の登拝道沿いに茶屋が増設され、大正末には富山県が国立公園指定をめざし、山小屋を集中的に新設したことを把握した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本では古来より山地が信仰の対象とされ、近世には庶民が講を組織して高山の山頂をめざしたが、その登拝活動を可能にしたのは山小屋の存在であった。しかし、これまで研究対象として看過されてきたため、こうした山小屋建築の歴史的・文化的価値が評価されないまま現代的に建て替えられ、各山域に固有の建築形式やそれらが成す山岳景観が失われている。申請者の先行研究の対象である富士山と本研究の成果をあわせて、日本の山岳文化の一端を形成してきた信仰にねざす山小屋建築という建築類型の把握を進めることができた。山小屋建築の将来像を模索する上で本研究の成果が果たす役割は大きいと考える。

研究成果の概要（英文）：This study examines the form and formation of mountain huts from the Edo period to the present day, focusing on worshipping mountains: Mt. Ontake, Mt. Haku (Hakusan) and Mt. Tateyama. On Mt. Ontake, I found the characteristic of floor plan related to somagoya or komorido which had been seen since the late Edo period and this is still being used today. On Mt. Haku, stone-walled shrine on the summit and muro and do below formed sacred mountainscape until the early Edo period. However, the ascent trails and muro declined after Heisenji Temple seized power on the mountain. On Mt. Tateyama, only Murodo served pilgrims in the Edo period and its unique structural form was not only a measure against snow accumulation but also a symbol of the prestige of the Kaga Domain. In the Meiji period, teahouses were built along the worship ascent trails. At the end of the Taisho period, Toyama Prefecture intensively built new mountain huts in order to have the mountain designated as a national park.

研究分野：建築歴史・意匠

キーワード：山小屋建築 山岳信仰 山岳景観 室 室堂 御嶽山 白山 立山

1. 研究開始当初の背景

日本では古来より山地が信仰の対象とされ、近世には庶民が講を組織して高山の山頂をめざしたが、その登拝活動を可能にしたのは山小屋の存在であった。しかし、従来の建築史研究は山岳信仰にまつわる寺社や麓集落に着目してきた。また民家史研究では主屋に主眼が置かれ、小屋という類型を研究対象とするものは僅かである。

申請者は、富士山の山小屋建築を対象に、近世から継承される形態やそれらが形成する山岳景観、近世から現代への変容過程を明らかにした。しかし、これらは富士山に固有の事象なのか、他の高山にも見られるものなのか。山岳信仰にねざす山小屋という建築類型の把握を進めるために、調査対象を拡げて相互に比較検討する必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、近世に大衆が登拝した、日本を代表する山岳信仰の対象として御嶽山・白山・立山に着目し、個々の山小屋の近世から現代にいたる建築形態とその変容を明らかにすることを目的とする。さらに、相互に比較して特徴的な形式を抽出し、その形成要因を考察する。山小屋建築の文化的・歴史的価値を見出し、保存と利用、歴史をふまえた改修や再建築の策定に活かし、継承に役立てたい。

3. 研究の方法

近世から現代までの史資料調査、登山道の踏査による現地確認と現存する山小屋の実測調査、山小屋関係者への聞き取り調査を行った。

4. 研究成果

(1) - 1. 御嶽山／近世

御嶽山黒沢口・王滝口登山道の山小屋について、現存する山小屋建築の実測調査（一例：写真1, 2）より特徴的な建築形式を見出し、史資料調査よりこの特徴の成立と変容を近世・近代に遡って検討した。さらに、これらの建築形式と別の用途をもつ建築形式との関連を検討した。なお、本成果は、研究代表者の先行研究課題（平成28～30年度 挑戦的萌芽研究）における成果に追加調査を加えて再検討したものである。

実測調査と現地確認より、妻入の山小屋に登山道が貫通する「中通り形式」の平面を明らかな特徴として見出した。近世の山絵図には妻入の山小屋が登山道に多く描かれることから、この中通り形式は近世に遡ることが示唆された。また、史資料調査より、かつて存在した、登山道を介して2棟の山小屋が並び建つ「両小屋形式」を見出した。中通り形式については、木曾谷の生業に関わる山小屋の建築形式との関連を検討した。近世、木曾の柚小屋には「中小屋」と呼ばれるものがあり、中通り形式をもった。黒沢口・王滝口登山道にも「中小屋」と呼ばれる山小屋が近世後期に成立しており、王滝口の中小屋の間口は近世の柚小屋にみられた間口と一致した。登拝者の宿泊小屋は、滞留に便の良い場所を選んで建てられた柚小屋を転用、あるいは柚小屋の呼称と建築形式を継承して建て替えられたと考えられる。一方、両小屋形式については、富士山吉田口登山道の富士御室浅間神社に残る割拝殿と類似し、ともに女人登拝に関連した籠り堂として使われたことから、山岳信仰から派生した山小屋の建築形式である可能性が示唆された。

また、御嶽山では近世、堂や行場の付近に山小屋（休憩・宿泊小屋）が派生、あるいは堂、行場、避難小屋が山小屋へ発展したこと、信仰対象となる像や祠堂とともに山小屋が講社より寄進されたことを把握した。

御嶽山は信仰の山であり、かつ木曾谷の生業を支える里山でもあり、登拝のための山小屋においても信仰と生業各々にねざす建築形式が並存したことが明らかとなった。いずれの形式も登山道と分かれ難く結びついており、現在にも継承される御嶽山の山小屋建築を特徴づけている。



写真1 黒沢口登山道 七合目 行場山荘 外観



写真2 黒沢口登山道 七合目 行場山荘 内観

(1) - 2. 御嶽山／近世～近代前期

御嶽山の王滝口登山道の山小屋は、近世後期から昭和38年（1963）度まで王滝村が所有し入札によって運営・管理した。この関連史料が村に現存する。そこで、王滝口の山小屋の入札制度について史料調査を行い、建設と運営・管理の実状を検討した。なお、本報告書では既発表の、近

世後期から明治21年(1888)までの史料より把握した事項について述べる。これ以降の入札については改めて論文として発表する。

王滝口は、寛政11年(1799)に黒沢口と取り決めを結んで公認されたが、その直後から入山料や宿泊料など登拝者がもたらす収益を8の枝村(組)で平均化し、遅くとも天保期には山小屋の運営に入札制度を導入してその収益から運上金を納めた。王滝村において登山道沿いの山小屋は公共の財産であり、建設・運営・管理のいずれも入札を行い、村民が応札した。運営・管理においては運上金が入札対象とされ、最高値が落札し、修繕・新設においては請負額の最安値が落札する規定であった。登拝の状況に応じて運営・管理の運上金は免除され、修復費や講中からの寄進等を加減した後、組々へ割渡されて御救金としても機能した。山小屋は山岳環境下において登拝者の生命を守るとともに、山麓に暮らす村民の生活基盤となるインフラストラクチャーでもあったことを把握した。

(2) 白山/近世

白山の、加賀・越前・美濃の三禅定道におかれた山小屋「室」について、中世末から近世までの山絵図、古文書、登拝記等における記述を調査した。大衆登拝が隆盛した近世の白山における室の所在、所有、形態、普請などの諸相を確認し、それらを総じて室の変遷と特有の建築形式を考察した。

白山では、戦国期より、大汝峰・御前峰・別山頂上に置かれた三社の造営権「杣取権」が三禅定道の里宮と登拝拠点となった村落の間で争われた(白山争論)。社殿の造営によって登拝者から参銭を得たことがその一因である。また、室は三社の参詣に欠かせない施設であり登拝者から旅籠銭が得られたため、争論は室を巻き込み、その盛衰に影響した。

白山において室は、禅定道沿いの修験者が神聖視した場と最も神聖な領域である三山の頂上付近に置かれ、近世前期には後者に集中し、主に利用された。高山の大衆登拝において室は必要不可欠な施設であり、かつ、特に、登山道上の信仰登山口村落にとって登拝稼業は生業の一つで、室は自らの存亡に関わる施設であった。白山麓18ヶ村が天領とされる寛文8年(1655)までは、国境とも重なる頂上付近の領有を主張するために国守によって室が設けられ、村落が維持する側面もあったと推察された。近世中期以降、富士山や御嶽山では講による大衆登拝が隆盛し室が発展したが、白山では度重なる争論の末、享保13年(1728)平泉寺の支配が確定し、室は淘汰されて衰退したことが明らかとなった。

最も厳しい環境となる頂上付近の室は、僅かな平場や水場を利用、造成して設けられた。石垣で防風した木造の簡素な小屋で、修繕や再建を繰り返したことが明らかとなった。かつては、石垣で囲まれた頂上社殿とその直下にある室と堂が白山登拝の核心となる山岳景観を形成したが、登拝の大衆化により近世後期には堂が廃絶し室のみとなった。さらに、上述のとおり、白山の平泉寺支配により室も衰退していった。近代以降は、かつての御前室(越前室)が建て替え、増築されて現在まで営業を続けているが、所有者の史料編纂の関係で史料閲覧が叶わず、本研究期間中に検討できないことが判明したため、研究期間終了後となるが改めて調査する。

(3) - 1. 立山/近世

近世、立山では信仰登山口集落である岩嶮寺、または芦嶮寺の宿坊に前泊し、未明より登山して「室堂」に宿泊した。現在、芦嶮寺に宿坊「善道坊」(標高410m、写真3)と室堂平に「立山室堂」(国指定重要文化財、標高2,450m、写真4)の近世遺構が残る。これらの調査報告書に依拠しつつ、立山登拝のための山麓と山頂における宿泊施設の比較を行い、これらの建築形態を形成した要因について検討した。

立山においては山麓と山頂のいずれにおいても積雪への対応が重要であった。室堂では梁間の中心にたつ柱をすべて棟持柱とし、総柱建てという特異な構造を採る。また、善道坊では登り梁と地棟を用いて小屋を組む。しかし、室堂の特異な構造は、寄進した加賀藩主の威信によってその荘厳性が一層高められたとみられる。一方、1年のうち2ヶ月ほど使用される室堂に比べ、1年を通して居住される山麓の宿坊では、集落内における宿坊としての表構え(坊造り)の表出、家人の日常の営みや生業をふまえた間取りが重視された。山小屋建築は、厳しい自然環境の制約のなかで形成されてきたが、信仰にねざして発展した宿泊施設においては、その信仰形態の変化やそれらを普請・管理した者らの性格にも影響を受けて形成されたことが、立山においても明らかとなった。



写真3 善道坊 外観



写真4 立山室堂 外観

(3) - 2. 立山／近代

近代に入り、立山山麓の芦峯寺は登山ガイドを輩出し、山小屋を営むようになり、立山は近代登山の舞台となっていった。明治から昭和初期にかけて史料調査を行い、近世から継承された室堂の近代化と、近代以降、新たに開設された山小屋の開設過程を検討し、それらを牽引した要因を考察した。

明治期、近世の登拝道沿いに茶屋が増設され、室堂は北室・南室を一体化して営まれたが、これ以上の改変は進まなかったとみられる。大正中～後期になると、立山博物館による先行研究が指摘するとおり、新たな大衆登拝やエリート層による近代登山（未踏地開拓や積雪期登山）が山岳環境下で生命基盤となる山小屋整備の必要性を訴える機会になったことを改めて確認した。本研究では新たに、こうしたエリート層がスイスアルプスの建築形式を立山にもたらし、当時の標準的な石室を近代化した山小屋が立山に新設された（図1）ことを明らかにした。

一方、同時期、富山県は水力電気事業とともに立山・黒部の国立公園指定をめざし、大正11～昭和2年（1922～1927）に集中して山小屋を整備したことが明らかとなった。富山県の計画は、当時、日本において旅行の大衆化を牽引した鉄道省や新聞社の影響を受けたものであった。かつ、観光推進と国民の健康増進を目論む国立公園の制度化において中流階級層の登山は推奨すべき活動であり、登拝や近代登山と異なる大衆登山のための施設整備は不可欠であった。近世に宿坊を営んだ衆徒らによる芦峯寺一山会はこれらに協力し、室堂については大正に設備・内装の改善、昭和には棟の増改築を進めつつ、富山県等によって新設された山小屋の継承や改善も担った。しかし、山小屋稼業に携わる芦峯村民に自ら小屋を営もうとする動きが生じ、山小屋に関する一山会の役割は戦後までに終焉したことを把握した。

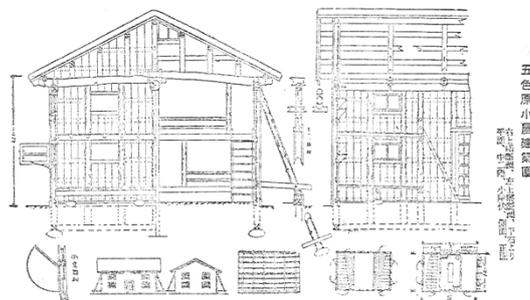


図1 五色原小屋 建築図

(3) - 3. 立山／近現代

前項に記した史料調査の結果、立山では大正期以降、それまで小屋など建てられていなかったより厳しい山岳環境となる立地に山小屋が開設されたことが明らかとなった。山岳信仰において神聖な領域とされた人が立ち入れない領域は、苛烈な自然環境下において人が滞留できない領域でもあったと推察され、山小屋の立地の変化や建物の実体から、信仰登山から近代登山への変化が捉えられるのではないかと考えた。そこで、太平洋戦争後に新設された剣沢沿いの真砂沢ロッジと、大正期に鉱夫小屋として建てられ登山者に利用されるようになった池ノ平小屋の建物について実測調査を行った。雪崩や雪圧に常襲される立地環境において、石積みを利用して小屋に掛かる数種の荷重に耐えており、また微地形に応じて常設・仮設建物を組み合わせて山小屋を構成していることを確認した。

山小屋の立地に表れる山岳信仰から近代登山への変化については、本研究課題に続く今後の検討課題としたい。

(4) 富士山／近現代

富士山について、山小屋（石室と茶屋）の実測調査をもとに各々の具体的な構法を検討した。なお、研究代表者の富士山に関する先行研究課題では、五合目より上に建てられた石室（図2）と下の茶屋について建築形態と変遷を明らかにしている。

現存する五合目以上の山小屋（写真5）では、断片的ではあるものの、近世後期の史料に描かれた石室の平面構成や構法を継承していることを把握した。調査結果を総合すると、多くの石室で、もとは登山道に沿って平側全面に幅半間の土間を通す形式をもったとみられる。昭和30年代には洋小屋が導入されたが、馬や強力による搬入を考慮した材長・材径に抑えられた。五合目まで自動車でアクセスできるようになったこの頃に建設された石室は、登山者の増加に備えて建て替えられたが、旧来の運搬手段に頼った建設であり、未だ近代化の過渡期であったと言える。また、頂上では、崖と一体化した控え壁をもつ石室を確認した。建屋の背後に寄り掛かる山体がなく、一年を通して厳しい偏西風に晒されるため、頂上の環境に適応して控え壁が発達したと考えられる。茶屋は、近世後期に確立した立地と数を大正後期までほぼ保っていたが、観光化の進展を受けて特に五合目五合目に急増したことを把握した。昭和39年（1964）の富士スバルライン開通によって衰退するまでに、数は微減しつつも機能や規模を拡大した。近世後期にみられた一室空間は昭和30年代までに室を分化し、山側や登山道側に下屋を付け、主屋を間口方向へ拡張し居間（客間）とした。また、主屋に近接して複数の付属屋を設けた。主屋は、周辺で調達できる資源を用いて登山道に対し開放的に造られた。材を丸太のまま用いることも多く、自前で造

作されたとみられる部分もあったが、増築された居間には畳が敷かれ天井や床の間に設えられた。また、半数以上の茶屋が付属屋として休息所をもった。やはり丸太を多用し、より簡易で仮設的な構法であった。



図2 『富士山明細図』, 「八合目」



写真5 吉田口登山道 七合目 日の出館 外観

(5) 那須岳／近現代

湯の信仰にねざす那須岳三斗小屋温泉大黒屋旅館について、明治2年(1869) 再建・同5年(1872) 増築と伝わる本館(写真6)の復元的考察と増改築の過程を検討した。

本館には、同じく湯の信仰に根ざしつつも登拝・湯治という異なる滞在目的に即した旅館・自炊の湯宿の形式が、明治2年再建の棟と同5年増築の棟に各々みられ、併存していることが明らかとなった。このような特徴は、温泉旅館建築に関する既往研究の成果(村田・初田2000)に照らすと、近世の湯宿の典型に類似する。明治2年再建棟1階の間取りは黒羽藩の家老職を務めたと伝わる小屋主一家の出自との関連が窺われ、黒羽藩の上級武士宅の間取りにも似た居住空間をもつ。また、2階の客間(写真7)は白湯山信仰の講社が一夜を過ごす宿としての格を備えている。他方、明治5年増築棟は1・2階とも湯治客が長期滞在する典型的な湯宿の造りである。また、本館は厳しい山岳環境下にある建物だが、特殊な構法を用いず、高木に囲まれた立地を生かしつつ、建物を一棟に統合して外的環境に晒される面を減じ、建物への影響から浴室棟を突き出すよう配置を換えるなどして存えてきた。その増改築の手法には、厳しい環境に対する代々所有者の観察眼や経験に基づく判断があったと思われる。

昭和大改修においては積雪に耐えるよう壁を増したが、湯宿としての開放性は保たれた。度重なる増改築を経てもなお、近世の湯宿に類似する貴重な遺構であり、山小屋建築の一つの系譜を示す事例であることが明らかとなった。



写真6 大黒屋旅館本館 外観



写真7 大黒屋旅館本館 内観(客間)

(6) 考察

本研究では、御嶽山・白山・立山における近世から近代・現代までの山小屋の建築形態とその変容を明らかにした。富士山に関する先行研究の成果を加えて比較すると、それぞれの歴史的・地理的背景、信仰形態や登拝習俗、信仰という人間の精神活動を凌駕する山岳環境、登拝を差配した山麓の信仰登山口集落の性格とその生業などによって山小屋の建築形態が規定されたことが明らかとなった。各々の形態には類似がみられ、これは山岳信仰にねざす山小屋の建築形式と捉えられる。一方で、各々の間にみられた差異は各山域の特徴と言えるだろう。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により計画どおりに調査を遂行できなかった部分が一部に残ったため、今後も引き続き補足調査を行い、考察の上、論文にて発表する。

出典 図1: 北尾鐘之助『日本山岳順礼』, 創元社, 1927、図2: 小澤隼人源寛信, 天保末~弘化(1840-1845), 本庄雅直家蔵、写真1~7 撮影: 奥矢恵

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 奥矢恵	4. 巻 2023年度
2. 論文標題 池ノ平小屋にみる立地環境の流動に対する山小屋の適応	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本建築学会 大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 奥矢恵	4. 巻 88
2. 論文標題 近世の白山三禅定道における室の変遷と形式	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本建築学会 計画系論文集	6. 最初と最後の頁 1395-1403
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3130/aija.88.1395	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 奥矢恵	4. 巻 2022年度
2. 論文標題 立山における室堂の近代化と山小屋の新設過程	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本建築学会 関東支部優秀研究報告集	6. 最初と最後の頁 175-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 奥矢恵	4. 巻 2022年度
2. 論文標題 真砂沢ロッジにみる立地環境の流動に対する山小屋の適応	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本建築学会 大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 617-618
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 奥矢恵, 大場修	4. 巻 28
2. 論文標題 那須岳三斗小屋温泉大黒屋本館の復元的考察-湯の信仰にねざす山小屋建築	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本建築学会 技術報告集	6. 最初と最後の頁 465-470
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3130/aijt.28.465	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 奥矢恵	4. 巻 92
2. 論文標題 白山争論下の三禅定道における室の変遷と普請-白山の山小屋建築に関する研究(2)-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本建築学会 関東支部研究報告集II	6. 最初と最後の頁 541-544
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 奥矢恵	4. 巻 2021年度
2. 論文標題 立山登拝のための山頂と山麓における宿泊施設の比較	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本建築学会 関東支部優秀研究報告集	6. 最初と最後の頁 203-206
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 奥矢恵, 北川洋	4. 巻 86
2. 論文標題 富士山の吉田口登山道における茶屋の変遷とその構法	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本建築学会 計画系論文集	6. 最初と最後の頁 1073-1081
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3130/aija.86.1073	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 奥矢恵	4. 巻 2020年度
2. 論文標題 王滝口登山道における山小屋の入札制度-御嶽山の山小屋建築に関する研究(2)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本建築学会 大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 111-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 奥矢恵, 大場修	4. 巻 26
2. 論文標題 富士山における石室の形式と構法	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本建築学会 技術報告集	6. 最初と最後の頁 753-757
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3130/aijt.26.753	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 奥矢恵・大場修	4. 巻 85
2. 論文標題 御嶽山における山小屋の建築形式と信仰・生業の関わり	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本建築学会 計画系論文集	6. 最初と最後の頁 131-140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3130/aija85.131	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 奥矢恵	4. 巻 90
2. 論文標題 近世の白山三禅定道における室の所在・所有と形態 - 白山の山小屋建築に関する研究(1)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本建築学会 関東支部研究報告集II	6. 最初と最後の頁 599-602
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 奥矢恵・北川洋	4. 巻 90
2. 論文標題 吉田口登山道における茶屋の変容とその構法 - 富士山の山小屋建築に関する研究(11)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本建築学会 関東支部研究報告集II	6. 最初と最後の頁 595-598
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 奥矢恵
2. 発表標題 池ノ平小屋にみる立地環境の流動に対する山小屋の適応
3. 学会等名 日本建築学会 大会学術講演会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 奥矢恵
2. 発表標題 立山における室堂の近代化と山小屋の新設過程
3. 学会等名 日本建築学会 関東支部研究発表会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 奥矢恵
2. 発表標題 真砂沢ロッジにみる立地環境の流動に対する山小屋の適応
3. 学会等名 日本建築学会 大会学術講演会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 奥矢患
2. 発表標題 白山争論下の三禅定道における室の変遷と普請-白山の山小屋建築に関する研究(2)-
3. 学会等名 日本建築学会 関東支部研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 奥矢患
2. 発表標題 立山登拝のための山頂と山麓における宿泊施設の比較
3. 学会等名 日本建築学会 関東支部研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 奥矢患
2. 発表標題 王滝口登山道における山小屋の入札制度-御嶽山の山小屋建築に関する研究(2)
3. 学会等名 日本建築学会 大会学術講演会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 奥矢患
2. 発表標題 近世の白山三禅定道における室の所在・所有と形態 - 白山の山小屋建築に関する研究(1)
3. 学会等名 日本建築学会 関東支部研究発表会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 奥矢恵・北川洋
2. 発表標題 吉田口登山道における茶屋の変容とその構法 - 富士山の山小屋建築に関する研究(11)
3. 学会等名 日本建築学会 関東支部研究発表会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関